

クリエイティブな発想と最後まであきらめない執念

今年の秋から始まるNHK朝ドラは、日清食品創業者の安藤百福さん夫婦をモデルにした「まんぷく」に決定しています。安藤百福さんは世界初のインスタントラーメンを開発した人として知られており、安藤百福発明記念館が大阪や横浜にあり、これは、発明・発見の大切さやベンチャーマインドを学ぶ体験型食育施設で、安藤さんが抱いていた、子どもたちに発明・発見の大切さを伝えることを具現化する場として運営されているようです。

安藤さんは、終戦後の食糧難の時代、大阪駅近くに1杯のラーメンを求めて並ぶ長い行列を見て、この行列に大きな需要が隠されていると確信しました。そこで、寒空の外で並ばなくても日本人が好きなラーメンを食べられるように、“お湯があれば家庭ですぐ食べられるラーメン”づくりの研究を始めたそうです。安藤さんは自宅の裏庭に建てた小屋で、道具や材料は全て自分で集め、たった一人で休みなく研究を進めたそうです。美味しくて飽きのこない味、台所に常備できる保存性があること、調理に手間がかからないこと、値段が安く安全で衛生的であることを目標に研究を進めていきました。しかし、山のように作っては捨てるという日々が続いていきました。ある日安藤さんが台所へ行くと、妻の揚げていたテンプレをみて、乾燥して保存性を高める麺の製造と、注いだお湯が水分の抜けた穴から吸収されて麺全体に浸透し、元の柔らかい状態に戻るという瞬間油熱乾燥という製造技術を生み出しました。この製造技術の開発により、1958年8月世界初のインスタントラーメン「チキンラーメン」が発売されました。お湯を注ぎ2分で食べられるというラーメンは当時では考えられない食品であったため、「魔法のラーメン」と呼ばれたそうです。

さらに、チキンラーメンを世界に広めようと考えた安藤さんが欧米に視察旅行に出かけたときのこと、現地の外国人がチキンラーメンを小さく割って紙コップに入れてフォークで食べ始めた様子を見て、日本人と欧米人の食習慣の違いに気づき、麺をカップに入れてフォークで食べる新製品の開発に取りかかりました。容器は片手で持てる大きさで、軽くて断熱性、経済性に優れた発砲スチロールの容器にしました。この容器の開発も簡単なものではなく、食品容器にふさわしい品質にするまでは相当な時間を要して研究が進められたようです。

こうやって、ようやくカップは完成したものの、麺をカップに収めることも難しい問題でした。麺をカップより小さくすれば簡単に入りますが、これでは輸送中に麺が揺れ動いて壊れてしまう。そこでカップの底より麺を大きくしてカップの中間で麺を固定する中間保存法というアイデアを思いつきました。しかし、カップの上から円柱形に形成された麺を入れても、麺が傾いたりひっくり返ったりしてうまくカップに収まりません。四六時中どうしたらうまくカップに収まるか考えていたところ、ある晩布団に横たわっていたとき、天井がぐるっと回ったような錯覚に陥ったそうです。そこで「カップに麺を入れるのではなく、麺を下に伏せておいて上からカップをかぶせればいい」とひらめきました。逆転の発想により、確実に麺をカップに入れることが可能となり工場での大量生産ができるようになりました。

他にも容器のふたや具材、麺の揚げ方など様々な知恵や工夫が盛り込まれ、1971年9月「カップヌードル」が完成しました。完成したカップヌードルがすぐに評判になったかというところでもなかったようで、立ったまま食べるのは行儀が悪いとか、価格が他の即席麺の4倍もすることから高いということではなかなか店頭には置いてもらえなかったそうです。そこで安藤は新しい販売ルートを開拓しました。それは、買ったその場でお湯が出てすぐに食べられるという「お湯の出る自動販売機」の開発です。さらに、1972年2月に起こったあさま山荘事件で、カップヌードルを寒い中食べている機動隊員の姿が映し出され、これをきっかけに「カップラーメン」は爆発的に売れだしました。

1973年にアメリカ進出、その後ブラジル、シンガポール、香港などに次々と拠点が広がり日本食生まれの世界食となりました。その後も研究を続け、無重力状態でもスープが飛び散らない宇宙食ラーメン「スペース・ラム」を完成させ2005年7月宇宙へ出発しました。

『偉大な成功には失敗が不可欠である。早く成功したければ、人の2倍失敗することだ。(ブライアント・トレーシー)』新しいことに挑戦して、すぐにいい結果を出せることなどほとんどない。だから成功には失敗が不可欠である。失敗を重ねるうちに最適な方法が分かるようになり、だんだん自信がついてくるものである。失敗したことがない人は何かをやり遂げたことがない人だ。それなのに失敗を恐れてるくに挑戦しようともしない。失敗を恐れないであきらめずに挑戦すること、目の前の困難を解決するために考え抜くことはこれからの社会を生き抜く上で大切なことなのでしょう。